

ーは滋養力と慈母性を示している。さらに水には神秘的な治癒力・変身力があるとされた。そして庶民にとっても重要なのは、宗教的浄化力である。聖地で沐浴することによって、それまでに蓄積された罪障が浄化されると考えられたのである。サンスクリット語で聖地を表す言葉「ティールタ」は川の浅瀬などを意味するといわれるが、通俗的語源解釈では、此岸から彼岸へ渡る場所、すなわち天界に通じる場所なのである。プラーナ聖典のなかには聖地の縁起や巡礼案内を説く「マーハートミヤ」(威光書)文献が含まれるが、いくつかある「ヴァーラーナスイー・マーハートミヤ」文献では、ガンガーは繰り返し尊崇され、まさにガンガーの存在が聖地の環境保全に役立ってきたことが伺える。

しかし現在、インドは猛スピードで近代化を推し進めている過程で、ガンジス川に流れ込む工場廃水などの問題も生じている。宗教的な意味で優れた浄化力を持つとされるガンジス川も、知らないあいだに水質汚濁が進んでいる。一九七〇年代半ばからそれに気付きはじめた人々が、八〇年代に入って浄化運動に取り組みはじめた。一九八二年に「清浄なるガンジス運動」(ガンガー・スワッチュ・アビヤーン)を開始した民間団体のサンカト・モーチャン財団の代表者ヴィールバドラ・ミシユラ氏は、寺院の管長であるとともに、当時大学の工学部教授であった。宗教者と科学者という両方の立場に立つ氏は、この問題に警鐘を鳴らし、音楽会などの集会を開いて水の大切さを再認識させる努力をしてきた。このような民間の運動に呼応して、政府も浄化プロジェクトを立ち上げた。ラージーヴ・ガー

ンディー元首相は「中央ガンジス川公共事業機関」を設立し、ガンジス河川環境破壊の修復のために「ガンジス川行動計画」(Ganga Action Plan)が開始された。また最近では、ユネスコの世界遺産に「ガンガー川と河岸およびヴァーラーナスイーの旧市街遺産地区」を登録しようとする運動も立ち上げられた。

古来、環境保全の対象と意識されてきたはずの聖地が汚染されたのには様々の要因がある。人口増加による生活廃水、無規制な工場廃液、意識的取り組みへの無関心などが複合的に関係しているであろう。しかし何よりも根源的な理由は、ガンガーが宗教的に尊崇され、汚染されているはずがない、という誤った慣習的思考ではなかったろうか。しかしまた、そのことに気付いたのも伝統的な寺院の僧侶であった。インド政府や外国からの援助の申し出があっても、当事者が気付かなければ運動は始まらない。教典の教えがいかにすぐれていても、それが即環境倫理になるわけではなく、そこで日常生活を送る当事者の再認識が重要であることを、ヴァーラーナスイーの事例は示唆しているといえよう。

## 中世ヒンドゥー教にみる

### 『地上の天界』説と環境倫理

橋本泰元

本稿は、デリーから約一四三キロメートル南南東に位置する

## パネル

ヴリンダーバン（サンスクリット名はヴリンダーヴァナ）というヒンドゥー教聖地で、中世に樹立されたヴィシュヌ教諸派のうち今日でも活発な活動を続けていて主要な宗派である、十六世紀に確立したガウリヤ・ヴァイシュナヴァ（「ベンガル・ヴィシュヌ派」の意味、通称、開祖の名を冠して「チャイタニヤ派」と呼ばれている）の神学がこの地をどのように捉えているか、すなわちその神学における自然観を、主要な聖典や神学書のなかに探って概要を示し、先ず特徴を描き出した。次に、この聖地の今日における環境保全活動にどのような倫理観が背景をなしているのかを、その活動状況を追って抽出を試みた。

旧来のヒンドゥー教においてクリシュナ神は、宇宙的なヴィシュヌ神の化身として位置付けられているが、十世紀ころの成立とされる諸ヴィシュヌ派の聖典『バーガヴァタ・プラーナ』以降のクリシュナ神は、究極の真実在である最高神と見做されるようになった。そしてヴリンダーバンは、そのクリシュナ神が少・青年期を過ごし、神々しい行状（リーラー「遊戯」）を示現したもつとも聖なる地と見做されるようになった。

チャイタニヤの六人のゴースヴァーミンと呼ばれる弟子であり神学者たちは、文学の審美論であるラサ（情趣）論を応用して、帰依者のクリシュナに対する信愛（バクティ）の情は解脱であると説いている。すなわち、帰依者は、クリシュナのリーラーに参加し帰依を捧げれば、クリシュナに対して奴僕・友人・両親・愛人としてのいずれかの情感（ラサ）を心に抱くことができ、その状態こそが解脱であるとする。さらに帰依者の典型である牧女ゴーピーの中心人物ラーダーがクリシュナに捧

げる無私なる帰依と愛情の完成が、究極の宗教的目標と説く。そして、クリシュナが嘉したヴリンダーバンは、十六世紀の巡礼儀軌書が説くようになって、クリシュナの天界は、まさしくこの地上のヴリンダーバンに他ならないと説かれるようになった。そうして、現在、この「地上の天界」は毎年通常人口の四十倍の約二百万人の巡礼者を引きつけている。

こうしたクリシュナの地上の天界は、今日、自然・環境破壊の深刻な問題に直面している。地下水面の沈下による水質悪化、傍を流れるヤムナー川への工場廃水や下水施設不備による汚水流入による河川汚染、デリーや近隣の都市マトウラーにおける工場群の排気による大気汚染などで、聖地ヴリンダーバンは中世時代の理想の姿とはもはや乖離していると言わざるを得ない状況にある。こうした自然破壊に対する反応は、西欧人の改宗者やインド人のクリシュナ信徒によって出された。この環境保護活動の初期には、クリシュナ意識国際協会（ISKCON）のメンバーであったランチョール・プライムがWWF（世界自然保護基金）に申請し巡礼路の再緑化が開始された。下水問題に対しては、プライムは伝統的技法への回帰を唱え、マハートマー・ガンディーの言葉を引用してインド人に機械化と西欧的技術に対して警戒するように勧めている。その後、ヴリンダーバンの自然保護事業は、WWF Indiaに引き継がれ、ここでは伝統的な宗教的価値観ないし環境倫理が人々の意識を覚醒させ、活動に対する理解を深化させるのに有効であるとの認識が高まっており、WWFの後援で一九九五年に設立された国際的な組織であるAlliance of Religions and Conservation

(A R C「宗教と自然保護の関連性」)との連携によって継続されている。

多様な宗教伝統が共存しているインドで多くの宗教的価値観の中から自然保護に最も有用なものを探し出すことは、自然世界を保全し、あるいは回復しようとする人々にとってひとつの挑戦なのであろう。

## 輪廻と環境

——インド仏教の自然観再考——

渡辺章悟

インド仏教の自然観は、業の理論にもとづいた輪廻説と、生きとし生けるものの共通の働きである共業が環境世界を創造すると説く点に大きな特色がある。それは人間を含めた生命や環境世界を一体として捉え、関係性を起点に各自の役割を考察する。本発表はその自然観を、三つの世間説・業説・生命観を踏まえ、生命環境論の可能性を考えて行く。

伝統的な仏教の世界観は三界、三世間と言った三層構造によって理解されている。

A 三界・三界とは①欲界 (kāma-dhātu)・②色界 (rūpa-dhātu)・③無色界 (arūpya-dhātu) の三つの総称であり、それぞれ、①欲望にとらわれた境域、②欲望は超越しているが、物質的条件にとらわれた境域、③欲望も物質的条件も超越し、精神的条件のみがある境域を区分し、へ生きとし生けるものは

これら三つの境域を輪廻する」と考えている。

B 北伝の三世間・三世間は北伝と南伝の別がある。北伝の三世間は「五衆(蘊)世間・衆生世間・国土世間」の三種に分類される(『大智度論』大正 Vol. 25, 546c1-3)。衆生世間のサンスクリット原語は「生きものの世界」(sattva-loka)であり、器世間のサンスクリット原語 (bhājana-loka) は、文字通り「容器としての世界」の意である。

C 南伝の三世間・パーリ仏教でも表現は少し異なるが、上記の三世間と同様の三分が『清浄道論』(Visuddhimagga)、『世間灯明精要』(Lokappadīpakasāra) などの世界の構造を述べた記述に見られる。これらは以下のように北伝の三世間に対応している。

(1) 現象世間 (saṅkhāra-loka 行世間) → 智度論の「五蘊世間」

(2) 有情の世界 (satta-loka 有情世間) → 五趣の世界 → 智度論の「衆生世間」

(3) 空間の世界 (okāsa-loka 器世間) → 智度論の「国土世間」ただし、北伝仏教では「容器としての世界」(Skt: bhājana-loka) というが、南伝仏教では「空間としての世界」(Pali: okāsa-loka) という (Lps, Vis p. 204, DA vol. I, p. 173)。

周知のように仏教では業説によって人間の境遇や世界を規定している。有情の業には身口意の三つの働きがあり、その行為の結果によって各自の生き方が決まる。これを『大毘婆沙論』(No. 1545, vol. 27, 649a18ff) では「契経に説くがごとし、仏は摩訶婆に告ぐ。世間の有情は皆自業に由る。皆是れ業の